上賀茂・明神川水系の地形的特異性に関する研究

京都大学大学院　学生会員　○松下　倫子　　京都大学大学院　正会員　出村　嘉史
京都大学大学院　正会員　川崎　雅史　　広島工業大学　正会員　樋口　忠彦

1.　研究の目的

京都市北区の賀茂別雷神社（上賀茂神社）境内とその社家町では，現在でも良好な歴史的景観が保全されている．この地域を流れる明神川は，賀茂川の水を分流した流れで，神社境内を通過して社家町の邸宅の庭を潤し，近隣の田畑では農業用水として用いられてきた．明神川の起源を記述した文献史料などは発見されていないが，平安以前に建設された人工水路であるとの説[1)]がある．この説を受けて，明神川の流路について周辺地形との関連を読み取ると，明神川が他の水系のように農業利用を主な目的とした水路ではないことが推察される．

よって本研究では，明神川の水利用の形態と流路の地形的特徴を明らかにし，明神川の文化的背景に迫ることを目的とする．

2.　賀茂川の灌漑システムの概要

清水[2)]によると，賀茂別雷神社は賀茂川の灌漑用水路の利用権を握っており，灌漑範囲を水支配によって支配していた．賀茂別雷神社の社領である賀茂六郷は中世に成立し，近世には六郷の多くが社領ではなくなったが[3)]，六郷に対する水支配は近代に至るまで続けられた．中世の賀茂六郷の範囲は，明治時代の農地とほぼ重なり，中世から明治まで灌漑システムがほぼ変わらず維持されていたと考えるのが自然であろう（**図１**）．

賀茂川の灌漑システムは，いくつかの井手で取水した水を幹線水路から分流により細分化していき，広範囲の田地に行き渡らせるというものである．賀茂川の灌漑可能な範囲は，賀茂川の氾濫原と扇状地に当たる部分である．よって低地は農地として開発され賀茂六郷となり，賀茂川西岸の段丘上には集落が発達した．このような土地利用により，灌漑可能な低地を最大限田地として使用できる他，集落を比較的高地に置くことによって，賀茂川の洪水による被害から財産を守る

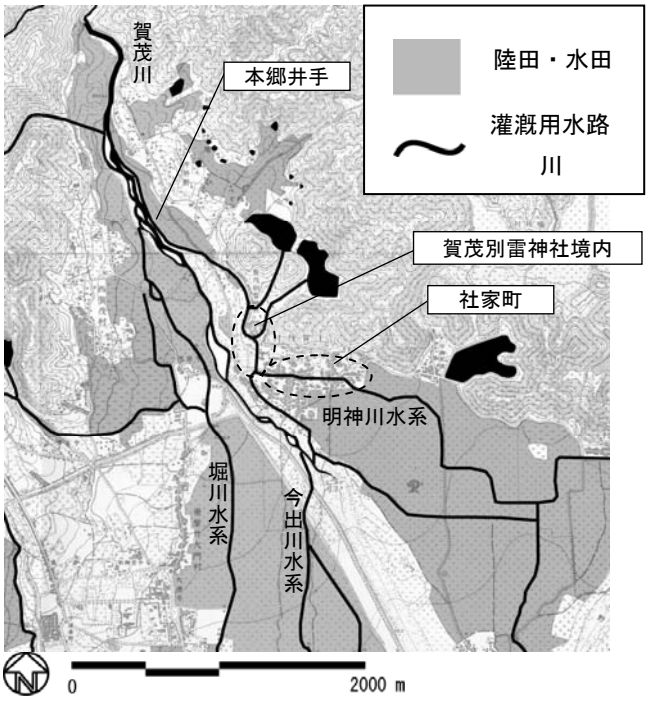

図１　明治期の田畑と灌漑用水路
（《明治 22 年仮製 2 万分の 1 地形図》の上に筆者加筆）

という防災の面での利点もあったものと考えられる．

3.　明神川の特殊性

賀茂川の灌漑システムにおいて，次のように明神川水系は他の水系から別格視されていたものと考えられる．近世には賀茂川には 8 つの井手があったことが知られるが，明神川の取水口である本郷井手では，賀茂川の水の半分を取水していたという．また小山郷との水論の際には，他の井手のために御手洗川（境内における明神川の別名）の水を減らして御手洗川やその末にある瀬見の小川などの水が枯れてしまうと，（賀茂神の）神慮も得がたいとする賀茂別雷神社の弁も見られる[4)]．

そして他の水系がそれぞれの灌漑範囲のすぐそばで取水し田地へ分配されるため，流路が低地の真ん中を通るのに対し，明神川については，井手での取水後段丘や山際などを通過した後，まず上賀茂神社境内に流

Key Words：明神川，上賀茂，賀茂別雷神社，社家町，賀茂川
〒615-8540　京都市西京区京都大学桂 4　京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻　　Tel：075-383-3329

入し，その後社家町を通過してから下流の田地へ導水する．このことから，明神川は農業利用目的ではなく，賀茂別雷神社とその社家町への導水を主な目的として設定された水路ではないかという仮説が成り立つ．

4.　明神川の流路についての検討

以上のような特徴を持つ明神川の流路を，地形の面から考察する．ただし流路の読み取りには，近世の社家町の様子を描く《享保 4 年社領絵図》，近代の社家町の水路を細かく記した《上賀茂村絵図》及び《大正 11 年都市計画地図》を用いた．

これらによると，明神川は主に二つのルートから社家町内に広く配分されていたことがわかる（**図２**）．現在の明神川より下流の家々については，現在の内川橋より東進する明神川から少しずつ分流させていた．そして明神川より北の片岡山麓に位置する家々へは，勾配により明神川からの導水は不可能であるため，片岡山麓から沢田川へ分流させ，その水を神宮寺内の晴池へ貯留し，そこから各敷地へ分配していた．このように，賀茂別雷神社のある片岡山麓から，社家町の土地の高低を踏まえながら，それぞれの敷地へ水を分配していた．

次に，このような通水を可能にする地形上の条件について考える（**図３**）．社家町は片岡山の南麓に当たり，賀茂川の河原より少しだけ高くなっているため，賀茂川の増水による水害の被害を受けにくい場所にある．よって一ノ鳥居と二ノ鳥居の間に広がる馬場のあたりから賀茂川のある南西に向かって緩やかに傾斜している．このような地形を克服し，現在の社家町まで賀茂川の水を導くためには，現在の馬場の辺りに井手を設け，東へ流路を取るのは不可能である．より北の地点から取水し，分流した水をなるべく高いレベルを保ちつつ神社境内まで送る必要がある．よって現在のように神社境内よりかなり上流から取水し，段丘の際や山裾といった比較的レベルの高い場所を通して片岡山麓へ至るという明神川の流路は，レベルの高い社家町への通水に適したルートであると言えるであろう．このような流路の設定は前述のように賀茂川における他の水系には見られず，明神川のみに見られる．

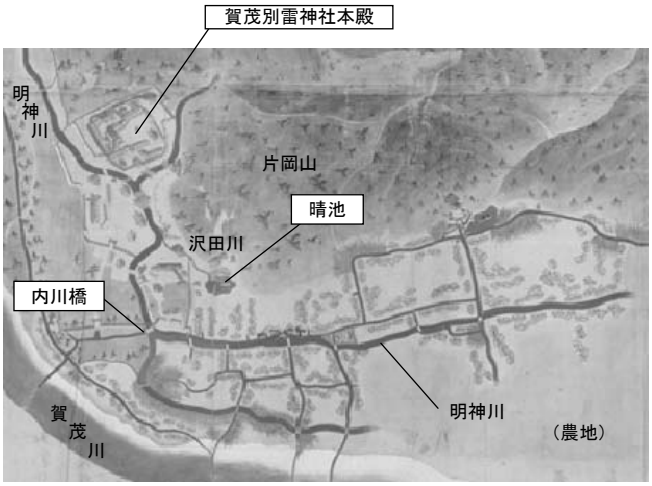

図２　近世の賀茂別雷神社・社家町と明神川水系
（《享保 4 年社領絵図》に筆者加筆）

5.　まとめ

以上をまとめると，他の水系と比較した明神川水系の地形的特徴として，水利用区域よりかなり上流で取水していること，農業に適した低地ではなく山際を通っていることが挙げられる．またこれらの特徴的な流路により，片岡山麓に位置する社家町への通水が実現されているということができる．以上の考察から，明神川が人工水路であるならば，明神川の建設は社家町への通水を実現するために行われたとの推測も可能である．

参考文献

1）勝矢淳雄「賀茂別雷神社と明神川に関する歴史的考察」，『京都産業大学国土利用開発研究所紀要　第 21 号』(2000)
2）清水三男「山城国上賀茂社境内六郷」，清水三男『清水三男著作集 2 日本中世の村落』(校倉書房，1974)，p. 243
3）京都市編『史料京都の歴史 6 北区』(平凡社，1993. 1)，p. 42
4）橋本政宣「賀茂別雷神社と賀茂川」，大山喬平監修『上賀茂のもり・やしろ・まつり』(思文閣出版，2006. 6)，p. 147

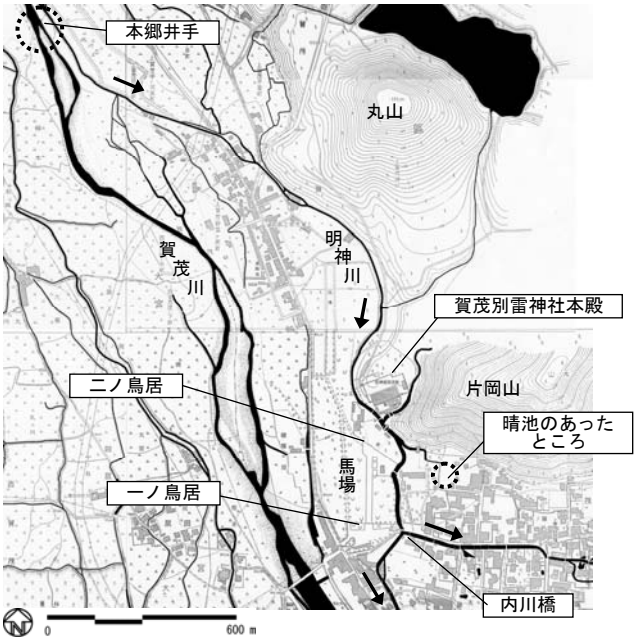

図３　明神川水系周辺の地形
（《大正 11 年都市計画地図》に筆者加筆，晴池の消滅後を描く）